

はじめに

中学国語の教師として37年。まもなく定年を迎えるにあたり、どこかでとりあげてほしい事柄を述べたい。研究者でもなく一介の教員でしかないため発表の機会もなく、ずっと疑問に思いつつ温めていたことである。

それは、「おくのほそ道」の冒頭の部分が芭蕉が何を述べようとした部分といえるのか？ という本質的な疑問に尽きる。

三学年の「古典分野」の教材として、どの教科書でも扱「おくのほそ道」の冒頭部。

「光村」の教科書においては、下記のように表記し、解釈している。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上にな生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。* 古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にまよはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にまよすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をほらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えむと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松島の月まつ心にかかりて、住めるかたは人に譲りて、杉風が別荘に移るに、草の戸も住み替はる代ぞ雛の家

面八句を庵の柱に懸け置く。

月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、過ぎ去っては新しくやって来る年もまた旅人に似ている。一生を舟の上で暮らす船頭や、馬のくつわを取って老年を迎える馬子などは、毎日毎日旅であって、旅そのものを自分のすみかとしている。(風雅の道に生涯をまかせた昔の人々の中にも、旅の途中で死んだ人が多く、私もいつの頃からか、ちぎれ雲のように風に誘われて、あてのない旅に出たい気持ちで動いてやまず、(近年はあちこちの海岸をさすらい歩き、去年の秋、隅田川のほとりのあはらやに(帰り)、蜘蛛の古巢を払って住んでいこうと)、次第に年も暮れ、新春ともなると、霞の立ちこめる空の下で白河の関を越えた、ものだと、そぞろ神が乗り移ってたまたもうそわそわとさせられ、道祖神が招いてくれるように、何も手につかないほどに落ち着かず、股引の破れたところを繕い、道中笠のひもを付け替え、三里に灸すゆる(など)旅の支度にかかるとも、松島の月(の美しきは)と、そんなことがまよる気になつて、今まで住んでいた庵は人に譲り、杉風の別荘に移ったのだが、草の戸も住み替はる代ぞ雛の家(元の草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいたころのわびしさとは違って変わり、華やかに雛人形などを飾っている。)

面八句を、(門出の記念に)庵の柱に掛けておいた。

「月日」も旅人、「年」も「船頭」も「馬子」も皆、旅人。芭蕉が尊敬してやまない昔の詩人(李白・杜甫・宗祇・西行)も旅人であり、旅の途中で死んでいった。芭蕉は「自分もそんな旅人でありたい」と願っている。前の旅から戻った芭蕉は、しばらくすると、次の旅のことを思い、いてもたってもいられなくなり旅の準備を始める。ついに江戸深川の「芭蕉庵」を人に譲ってしまう。その際、「草の戸も…」句を記した「面八句」を家の柱にかけておいた。

となるのだが、そもそもこの冒頭の段において、Q 筆者芭蕉は何を述べたかったのか？
もう少し具体的にいうなら、
a なぜ、芭蕉庵を人に譲ったのか？
b 柱に懸けおいた面八句は何のため？
という疑問が浮かび上がる。

d)については
・旅の資金を捻出するため
・古人にならない旅で臥す最後の旅となるかもしれないと決意を固めたため
という答えが考えられる。

門人も多かったらう芭蕉が、旅の資金を捻出するなどという目的を示唆するような風雅の道にそぐわぬことをここで述べるだろうか？と考えると、一つ目は消える。

この時46歳の芭蕉は決して若いとは言えない。何時旅の途中で臥すかわからないので、家を売り払って、覚悟を決めたというのは、たしかにその根拠とはなりえよう。

b)については
・ここに確かに私(芭蕉)は居たのだということを残すため
・「門出の記念」のため

などがあげられる。(2点目の「門出の記念」は光村の教科書の解釈より)自分自身の存在の証などというよりは、自己顕示欲に満ちた風雅にそぐわぬことを芭蕉が思ったのか？と考えると、これは消えそうである。

(門出の記念に)と括弧で補っているところは、私からすると大変すばらしく思える。ただし、「誰の、何の」門出であるかを表していないところが、もどかしくてならない。

この「面八句」と「庵の柱に懸け置く」について「中学校国語学習指導書3下」には次のように解説している。

【面八句】一略— 一番目の句を発句というが、「草の戸も……」の句は、芭蕉送別のために巻かれた百韻の連句の発句であることになる。ただし、「草の戸も……」を発句とする連句も、この句に関する門人たちの言葉も今日に伝わっていない。

【庵の柱に懸け置く】連句を書いた懐紙は、水引で結わえ、柱にかける習慣があった。「草の戸も……」の句を実景と取れば、すでに芭蕉庵は人手に渡っているわけであるから、庵は採茶庵(杉風が別荘)を指すことになり、想像上の句と取れば芭蕉庵を手放すときの句ということで、庵は芭蕉庵を指すことになる。

十八年度版教科書までは「表八句」「庵(いりま)」としていたが、原典の変更により、二十四年度版以降はそれぞれ「面八句」「庵(あん)」と改めた。

余談として、「庵の柱に懸け置く」の「庵」について、「正進社 新国語の便覧」でも、①移り住んだ杉風の別荘を指す ②もとの芭蕉庵を指す と二説を併記している。

学習指導書の記述から読み取れることは、柱に掛けたとされる面八句には「草の戸も……」の発句以外の句が残っていない(発見されておらず、書かれていたであろう句の内容を記す文献もない)ということなのだろう。

また、「庵」がどこを指すかについては、採茶庵と芭蕉庵の両説を併記する形をとっており、明言を避けた形となっている。(これは、資料集・便覧でも同じである)

なんでそうするのかいって、さすがの芭蕉でも、他人に譲り住人のいる家に、あつかましくもあがり込み、柱に面八句をかけたとは考えにくいのである。よって、杉風の別荘という説もありうるのではないか、とは想像できる。

さて、本題の「冒頭の段において、芭蕉が何を述べようとしたのか」に戻ろう。幾つかの、はっきりしない、疑問とも何とも言えぬもやもやを快刀乱麻を断つがごとく、すべての謎をすっぱり解き明かす答えがないものだろうか。

結論として、

「家(元芭蕉庵)の門出(旅立ち)」の段ととらえればよいのではないかと。

「月日」も「年」も「船頭」も「馬子」も旅人、すべてのものは旅人であり、自分も先人にのみならずつづりゆく旅人でありたい。この無常観と呼応する思いの中で、忘れものといえば草庵である。主人が旅に出れば、蜘蛛の巣がはってしまうだけのひなびた家と化すだけである。そんな草庵に新たな人生を送らせんと旅立たせただけであらう。

そう考えれば、面八句を柱に掛けたことも解決できる。譲る先の住人には女の子のいる家庭などは知った上で、引越して行く前に、草庵の柱に面八句を掛けておいたわけであり、そこには「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家(発句)」のみが書かれていたと考えられる。この発句以降の今後は、(連歌にならない)新たな住人とともに新たな人生を紡いでいってほしいという願いが込められていた。

旅人ではない(家)に着目して終わるこの冒頭の段、旅人⇒庵、庵の旅立ち。そんな糸が見えてくる。つまり、草庵の門出(新たな旅立ち)を祈念(記念)した段と思えてならないのである。

《謎を解き明かすヒントとして散りばめられたピース(欠片)と注釈》

・蜘蛛の古巢……芭蕉が旅に出て家を空けている時の状態→新たな旅(おくのほそ道の旅)に出たあとの芭蕉庵の様子をも暗示させる→帰ってこないかもしれない主を待たせるよりこの家を旅立たせよう。

・面八句……俳諧連句(連歌)の師といえる宗祇を意識し、数人の連作によって織りなす連歌の発句(草の戸も……の句)のみを記し、このあとの続きは、新たな住人と家とによって刻んでいってほしいという願い。

※「古人」芭蕉の尊敬してやまない詩人:①李白[冒頭:百代の過客、春立てる霞(煙花三月下揚州)]②杜甫[夏草:国破れて山河あり]③西行[夏草:時の移るまで、冒頭:月日、年二時]④宗祇[冒頭:面八句(俳諧連歌のならわし)]